

天災か人災か

国立病院機構 災害医療センター
中央放射線部技師長
小笠原 哲

放射線災害が、また発生してしまった。想定外（？）の地震と津波により電力供給が途絶え、炉心・貯留槽の冷却ができなくなり、水素爆発により放射能が拡散してしまった。しかしその後の報道により、次々と出てくる事実からはきちんと対応していれば防げたことが浮かび上がってくる。11年前のJCO事故は明らかな人災であった。放射線に対して知識のない職員にマニュアルを無視して指示を出し、臨界事故に発展させてしまった。扱っている物が何であるかを考えれば、きちんと管理監督の下に作業を進めなくてはならないことは明白である。臨界事故により中性子被曝をした作業員は自分の体が放射能物体と化し悲惨な最後となってしまった。この事故を機会に原発の事故を想定した、訓練、放射線測定器等の機材の整備、組織態勢の整備等が進んだのは事実である。がしかしそういった周辺の対応は進めても、肝心の原発自体の安全性が確保されなければならない。

チェルノブイリ原子力発電所事故、スリーマイル島原子力発電所事故がおこっているにもかかわらず、原発の安全神話を流し続け、万全な安全対策をないがしろにしてきた結果が今回の原発事故に至っているのではなからうか。

日本の原発は日本海側も太平洋側も沿岸に立地している。地震大国であること、津波も江戸時代を含めて昭和の三陸大津波など、歴史が証明している。何よりも東京電力の想定プランの中に10メートル級の津波は想定されているのに、目の前の対策を惜しみ安全対策に投資を惜しんだばかりに、巨額の投資をせざるを得なくなり今更悔やんだところで後の祭りである。津波に対して防波堤のように正面から受

け止める配置になっている建屋。原子炉建屋の中に発電機がない。高台などに発電機を用意するなど対応の方法はあったであろうに。原発は電気をつくるために冷却するための電気と水を必要とする発電システムである。そのシステムが破壊されれば今回のことのようになることは、想定内であったはずである。

15都県に放射能をばらまき、日本国土の約3分の一を汚染してしまった。水素爆発のあった日は天気もよく、南西、北西の風に乗り内陸深く汚染してしまった。核医学検査を行っている施設の排気口の監視モニターはそれを証明している。ということは、外気を取り込み排気している空調システムを採用している建物（ビル）の中はすべて汚染されたことになる。群馬県の農産物、静岡県のお茶葉が問題となる量が建物の中を駆け抜けて降り注いだことになる。窓を閉め切っていても空調を止めなければ何の意味もない、それでも政府のコメントは「さしあたり人体に対して、健康に影響はない量である」との声明を出して終わらせている。

日本国民はこれまで幾度となく被災してきた地震・津波に対し、立ち向かい再生してきました。天災だからとあきらめながらも辛抱強く復興してきました。しかし今回の事故後の政府の対応のまずさ、そして情報の隠蔽、監督官庁のやらせ、企業の安全対策に対する姿勢など天災だけでは片付けられないプラス人災により、故郷を失い、大事な人の命を失い、財産も仕事も失ってしまった人々に対し、政府も企業もお金だけではなくせめてきちんとした対応を望みたい。